

F/T13

FESTIVAL/TOKYO

ARTS
COUNCIL
TOKYO



東京文化発信
プロジェクト



TOKYO ● 2020

ラビア・ムルエ連続上演

Rabih Mroué Series:

33rpmと数秒間 / 作・演出：リナ・サーネー、ラビア・ムルエ

33rpm and a few seconds / Text, Direction: Lina Saneh, Rabih Mroué

11.14 (Thu) - 15 (Fri) 東京芸術劇場 シアターイースト

Tokyo Metropolitan Theatre, Theatre East

雲に乗って / 作・演出：ラビア・ムルエ 共同演出：サルマド・ルイス

Riding on a cloud / Text, Direction: Rabih Mroué Direction Collaboration: Sarmad Louis

11.16 (Sat) - 17 (Sun) 東京芸術劇場 シアターイースト

Tokyo Metropolitan Theatre, Theatre East

ピクセル化された革命 / 監督：ラビア・ムルエ

The Pixelated Revolution / Direction: Rabih Mroué

11.14 (Thu) - 17 (Sun) 東京芸術劇場 アトリエイースト

Tokyo Metropolitan Theatre, Atelier East



インタビュー：ラビア・ムルエ

現実と表象——「アラブの春」のかたわらで

——今回日本で上演される3つの作品はどれも、表象と現実の関係を扱ったものということができますが、一つひとつの作品の具体的な題材はどのように選ばれるのでしょうか。

正直いって、なぜ、ということに確かな理由はないのです。たとえば今回上演する『雲に乗って』は、家族の物語です。私は弟のイエッサとともに仲が良いですし、以前から彼と一緒に作品づくりをしたいと考えてはいました。ですが、同時に私はそれを怖れてもいたんです。なぜなら彼の物語はとても繊細ですし、個人的なもので、デリケートに扱わなければならないからです。少しでも扱い方を間違えれば、メロドラマにも、同情を買うようなものにもなってしまう、まるで「癒し」のための作品のようになってしまう。そんなふうと考えていた時に、フリー・レイセン（現・ウィーン芸術週間 演劇部門 芸術監督）から、イエッサについての作品をオランダでやらないかという提案をされました。それで初めて、この作品について具体的に考えることになりました。きっかけはそれだけです。

とはいえ、そこには、過去に私が扱ったたくさんのテーマへの繋がりがありました。『雲に乗って』は言葉についての作品です。言葉は表現のための媒体です。私はイエッサが銃弾を受けた後、すべてを忘れ、ABCから言葉を学び直さなければいけなかったことに関心を持ち、言葉の機能について考えました。一方、『33rpmと数秒間』には、留守番電話に話しかける女性の、言葉に関する長いモノローグが出てきます。あの台詞は、私とリナ・サーネーの二人で考えました。つまり、どちらの作品も

異なる方法で、ではありますが、言葉、表象を扱っているんです。そして、どちらも歴史との今日的なつながり、レバノン内戦……といった、私の過去作に共通するすべてのテーマを含んでいるんです。

——あなたの「言葉」や「表象」に関わる考え方は、レバノン内戦をはじめとするアラブ社会の複雑な現実の中で養われたものでもあります。それは「アラブの春」によっても変化しているのでしょうか。

全く変わっていません。『雲に乗って』のイエッサの台詞にもあるように、「あらゆることが私の人生の基準点にならないことを望む」というのが、その質問への私の答えです。それは、人生においてあらゆる出来事は等しく大事だという意味です。またそれが、私の考える「歴史」です。私は何かの「前」と「後」で変わるということがないように努めています。そのように変わってしまうことは危険です。何か変わったことがあったとしても、それは「アラブの春」が理由ではありません。

——とはいえ、日本人の視点からすると「アラブの春」はとても大きな出来事です。海外から見た日本のフクシマと同様に。

「アラブの春」は、それまでにはあまり活動していなかった人も含めた、たくさんのアーティストを創作へと向かわせました。彼らは情熱的に自分の感情や思想を表現しようとしていました。特にここ2年間は、エジプト、シリア、チュニジアのたくさんの

アーティストたちが、アートを通じて自分をアピールしていましたね。しかし、だからといって、彼らの作品が良いというわけではないし、悪いということにもならないと思います。

むしろ、注意しなくてはならないのは、アーティストであれば誰もが革命に参加しなければならないというようなフィルターがあるように見えることです。彼らにとって革命に参加することは、すなわちアートを通じて、ということなのでしょう。ただ、もちろんすべての作品を観たわけではありませんが、少なくとも私が観たものは、どれもあまり印象に残るものではありませんでした。とても反射的に作られた、アクティビスト的な作品で、そこには自省や反芻といったものがほとんどないように見えました。ある種のエネルギーを持っているという点では良いのですが。

ラビア・ムルエ

1967年、レバノン出身、バイルート在住。レバノンの季刊誌『Kalamon』や『TDR:The Drama Review』（ニューヨーク）の編集者としても活動中。バイルート・アート・センター協会の設立者であり、理事を務める。F/Tには、09秋『フォト・ロマンス』で初参加。現在、ベルリン自由大学、国立リサーチセンター「インターウェービング・パフォーマンス・カルチャーズ」フェロー。2010年、スポルディング・グレイ賞受賞。11年、プリンス・クラウス賞受賞。



——あなた自身は「アラブの春」をどう捉えているのでしょうか。

「アラブの春」は、表現の自由、民主主義、独裁政権ではない政府や制度を求めた運動です。それはアラブ地域では歴史上初めての、リーダーのいないデモンストレーションであり、革命です。それは純粋な必要性から始まった活動なのです。シリアではいまだに反体制派がまとまっていませんが、それはリーダーが先頭に立ち、そうでないものがついていく、といった組織にはなっていないからです。もちろん、この形でいつまでもやっていくわけにはいかないし、旧体制から未来を取り戻す、新しいプログラムの提案が今後は必要になるでしょう。ですが私は、この革命が人々の必要性やフラストレーションから、いわば衝動的に始まったという点をこそ、重要で意義のあることだと考えています。

(2013年5月26日 バйлルートにて／

取材・翻訳：梶山由香)

リナ・サーネー

1966年、レバノン出身。アシュカル・アルワン・レバノン現代芸術協会ワークスペースのカリキュラム委員。2008-13年、国立ジュネーヴ・デザイン大学教授。09-10年、ベルリン自由大学、国立リサーチセンター「インターウェービング・パフォーマンス・カルチャーズ」フェロー。F/T09 秋『フォト・ロマンス』で来日公演。その他の主な作品に、『リナ・サーネーボディ・パーツ・スタジオ』(07-09、ウェブ・プロジェクト)、『誰かが言い続けなければならない』(08、ビデオ・インスタレーション)など。



ラビア・ムルエとリナ・サーネー その足元にあるもの 相馬千秋 (F/T プログラム・ディレクター)

ラビア・ムルエとリナ・サーネーに初めて出会ったのは2004年のことだ。F/Tの前身である東京国際芸術祭(TIF)・中東シリーズの一環で、検閲をめぐる過激なモノローグ・パフォーマンス『ピオハラフィア』を招聘した。あれから10年が経ち、彼らは世界のメジャーな演劇祭や国際展の常連となり、その新作には世界の熱い注目が注がれるようになった。日本でも、にしすがも創造舎で世界初演を行った『これがぜんぶエイプリルフールだったなら、とナンシーは』(TIF2007)、バイルート空港が封鎖されアーティスト不在のSkype生中継上演となった『消された官僚を探して』(Shizuoka春の芸術祭2008)、『フォト・ロマンス』(F/T09秋)が相次いで上演され、レバノンから遠く離れた私たちに「異なる現実」を突きつけてきた。

テキスト、映像、パフォーマンスを自在に横断する彼らの仕事を語るには、「表象」という言葉を避けて通ることはできないだろう。ムルエは1967年、サーネーは1966年生まれであるが、それはすなわち、彼らの10代から20代が1975年から1990年まで続いたレバノン内戦によって覆われたことを意味する。人格や価値観が形成される人生のもっとも多感な時期を、常に戦争や死と隣り合わせで過ごしてきた彼らにとって、その重い現実を舞台上で扱うことは、それほど単純な話ではない。ムルエは2007年に東京で行われた講演会でこう語っている。「舞台の上で、戦争のときに感じた恐怖、苦しみ、痛みといった感情や過去の体験を、舞台の上で生の身体として表象することが可能なか、可能だとしたらどうやったらいいのか。結局この難問に挑戦する度に、そこでやっていることはチープな物まねにしかならない、という結論に行き着いてし



リナ・サーネー(左)とラビア・ムルエ

まった」。そこから彼らは「身体そのものが必ずしも舞台の上に現れているのではない演劇、つまり自分たちの戦争を体験した身体というものを語っていると同時に、しかしその身体そのものは見えない、その身体そのものによってこそ戦争を体験した身体というものをさせる、あるいは観客に考えさせる演劇」にたどり着く。描くべき現実を俳優の身体に代理させ、舞台上に再表象するのではなく、描くべき現実が代理表象不可能であるという認識から出発するというこの態度は、その後も一貫して彼らの創作の根本にある。

また彼らは、世界的なアーティストとして認められた今でも、必ずしも安全な生活や創作環境が保証されていないレバノンに住み続けることを選択している。それは彼らの創作が、一貫してレバノンという固有の土地の、固有の歴史や現実と根ざしているからだろう。そこには国家による検閲もある。しかし彼らは、そうした不自由さの中に自らの身体を置き続けることによって、確信犯的に「身体が不在の演劇」をつくり続けているのだ。

ラビア・ムルエの探求——それは見えているのか？

鶴戸 聡 (鹿児島大学法文学部准教授)

今回上映される映像作品『ピクセル化された革命』は、シリアの「革命」が内戦へとすり替えられていくなか、市民によって携帯電話で撮影されたデジタル画像を取り上げる。この「非学術的なレクチャー」でラビアが論じるのは、眼となったカメラについて、そしてレンズ越しの目撃と銃撃が重なり合う「ダブルシューティング」だ。狙撃者を目撃し、自らが銃撃された人間の残したデジタル映像は、彼のもう一つの眼となって、網膜に焼きついた最後のイメージを残す。見る者である撮影者は同時に見られた狙撃者から目撃＝銃撃される対象となり、しかも自分自身の姿を残すことがない。カメラが¹⁰喩としての眼になれば、その眼は肉体から着脱可能で増殖可能だ。他人の網膜を覗き込むことは容易く、ラビア・ムルエはいわば網膜＝画像を収集したアーカイブを開陳するのである。この「彼ら自身による死の記録」は、彼がこれまでに扱ってきた「殉教者」(シャヒード)の自画像や自爆テロの犯行声明ビデオと囚らざるもその機能を等しくする。異なるのは、そのアングルに撮影者自身が決して入り込まないということであり、そこにまた別様の痛ましさを感じられよう。

『33rpmと数秒間』(リナ・サーネーとの合作)は、ディヤ・ヤムトというある革命家の自殺をめぐるFacebook上の騒ぎを描いたものだ。舞台上にしつらえられたのは彼の部屋、レコードでシャ

ンソンが流れ、机の上のノートパソコンには彼のFacebookのページが開かれたまま、スマートフォンは留守番電話のメッセージを繰り返す。突如舞い込んできたディヤの死の報せにFacebookはにわか騒然となる。彼の思想、活動、自殺の原因について友人・知人たち(彼を個人的には知らない人まで)がインターネット上で議論を交わしていく。旧作『消された官僚を探して』同様、舞台は無人で、それどころかライブ映像もない。限りなく演劇から遠ざかっていく本作品が提示するのは再現されたライブ、人々の書き込みがオートマチックに現実を再構成していくスクリーンだ。『フォト・ロマンス』では、ラビアは映画の構成要素(イメージ・動き・声・音楽)を解体し、それをまた舞台上に再構成したが、複数のアクターによって作りあげられていくFacebookのページは「監督」不在でどこに向かうのかもわからない。唯一、管理者権限を振るってページに介入できるはずだったディヤ自身はすでにこの世の人ではないのだ。彼の不在、永遠の不在をめぐって書き込まれる不在者たちのメッセージ、埋め込まれた写真に動画。だが顔写真もアバターもないディヤはいわば顔のない存在のまま(顔の描かれることのない神や預言者のように)。たくさんの人々の言葉によって永久に不在となった人物を描き出すことは、誰かの死に際してわれわれが日常的に実践していることなのかもしれないが、それは当然真理に近づくものではなく、むしろ凡庸

な言辞に彩られた虚像をいくつも作り出すことになる。メディアの集合体であり、自動的に集積される言説のアーカイブとなったFacebookに映し出されるのは、真実の不可能性であり、われわれが生きているさまざまなフィクションの姿なのである。ディアの自殺と、完結してしまった彼の人生は、無数のディア像を生み出しながらメディアによって拡散される(彼のフォロワーは2,000人だ)。ページ上に「作られたもの」(フィクション)は人々を突き動かす力となるのか、それともインターネット上のから騒ぎに終わるのか、その行方は誰も知らない。

『雲に乗って』に登場するイエッサは、17歳の時に頭に銃撃を受け、記憶や言語、認識に関わる能力に障害を負っている。レバノン内戦によって傷ついた肉体を舞台上に載せることは、もはや眼に見える傷を見せることではない。大学進学を目前にして幼稚園をやり直すことになり、適切な言葉を選び出すのに困難を感じるイエッサ。レーニンやチャイコフスキー、マヤコフスキー(1930年に自殺したロシア・アヴァンギャルドを代表する革命詩人)と共に暮らしたと述べるに至って、記憶の混乱は妄想の域に達する。しかし、彼の抱えているもっとも根源的な問題はアイデンティティに関わるものだ。すなわち何と何がアイデンティカル(同一)であるのか、アラビア語でいえばフォーウィーヤ(彼であること性)が問題なのだ。三次元の物体を写した二次元の写真を見て、そこに複製された像を同一のものだと認識できない。その薄っぺらい紙は当然もとの物体とは別物であるにもかかわらず、われわれはそれらを同一のものだと認識する。喩によって(すなわちなんらかの隣接性や部分的同一性によって)われわれは世界を認識し、記憶に補助されながら表象を解読するが、イエッサはすべてにおいて同一でなければ同じものとは認識しないのだ。だから彼は世間で共有されているコード(約束事)を解読できない。スーラ(像・イメージ・写真)は何ものをも表象=代行しない。失われた記憶、揺る

がされたアイデンティティを補うようにスクリーンに映し出されるのはアイデンティティ・カード(身証)の類だ。通知表や登録証は「彼がなにもものであるのか」をそれぞれの方法で(そして極めて一面的に)保証してくれる「アーカイブ」なのだが、彼を取り巻く言説の数々によって彼自身が理解できるようになるわけでもない。演技を演技として認識できないイエッサの眼は、舞台上に表象されたものを理解できない。そのような肉体を舞台に上げるという背理は、「物騒なフィクション」の力を暴き、見ることの錯誤と表象不可能性を問い詰めてきたラビアの挑戦を、さらにラディカルな局面へと押し進めるものなのだろうか。

これらの3作品はどれも過去作との連続性がうかがわれるものであり、ラビア・ムルエのこれまでの歩みを振り返ってみるのが鑑賞にも有用だろう。

レバノン内戦で傷ついた肉体を舞台上に表現することの困難から、むしろ表象の不可能性や現実とのずれをテーマに写真や動画といった複製技術を利用した作品を作り出してきたラビアは「見る」としてそれ自体を徹底的に問うてきたといつてよい。

2000年に発表した『三枚のポスター』(小説家のイリヤース・フリーとの合作。未邦訳)ではシャヒードたちのポスターや自爆テロの犯行声明ビデオが題材となる。そこに映し出される人間はみな「殉教」しており、この世からいなくなって初めて人々の眼に晒されるというパラドックス、いわば「見る」ことによって不在者が現前するメカニズムが舞台上に載せられる。

また、03年発表の『消された官僚を探して』では、実際に失踪した官僚についての新聞記事を集集し、さまざまに展開していく言説を丹念にたどっていく。集積された情報に分け入ることによって何が見えてくるのか。「アーカイブ」の利用自体もテーマとなり、客席に潜んだラビアの資料を扱う手先のみが舞台上に映し出される。いわば不在者をめぐる探求が役者不在の舞台上に現前するという仕



『これがぜんぶエイプリルフールだったなら、とナンシーは』(TIF2007)
© Kohei Matsushima

掛けの作品なのだが、08年に静岡芸術劇場に招待された際、ヒズボラによる空港封鎖のためにラビアが来日できず、客席どころかバイルートの自宅からSkype中継されることによって劇場にすら不在の上演となった。

東京で世界初演を迎えた『これがぜんぶエイプリルフールだったなら、とナンシーは』(07年)では、レバノン内戦からイスラエルとの「紛争」に至る30年の現代史を、殺されるたびに繰り返し甦ってくる4人の活動家たちのモノローグを通して浮かび上がらせた。彼らの背後に映し出される所属党派のデジタル・ポスターは、目まぐるしく入れ替わることによって党派の興亡を描き出す。内戦の資料に沈潜するアーカイブの手法が冴えており、台詞主体で展開していくため他の作品に比べてテキストの重要性が高い(脚本はファディ・トゥフィークとの共同執筆)。その一方で「見る」ことよりもむしろ4人の語り手がお互いを決して「見ない」ことが観客の目を引く作品といえよう。交差することのない視線と成立しない会話がレバノン社会の病理を表している。

09年にアヴィニョン演劇祭で発表された『フォト・ロマンス』は、イタリア映画の傑作『特別な一日』(エットーレ・スコラ監督、1977年)を下敷きに、ファシスト政権下でヒトラー訪問に沸くローマを、親シリア派(3月8日連合)と反シリア派(3月14



『フォト・ロマンス』(F/T09秋)
© Jun Ishikawa

日連合)のデモであふれるバイルートに置き換えた傑作だ。政治的立場(そしてわずかに匂わされたホモセクシュアリティ)のために弾圧される男の役をラビアが、日常に疲れた団地妻の役をパートナーのリナ・サーネーが演じるのだが、その「映画」はすでに撮影されており、舞台上で演じられるのは作品の検閲なのである。しかも、フィルムを持ち込む制作者を演じるのもリナなら検閲官の役もラビアという二重配役になっている。題名に「フォト」とあるように、映像はほとんど動画ではなく写真をつなぎあわせたコマ送りで音声はなし。すべての台詞はリナがその場で読み上げ、バックミュージックはシャルベル・ハーベルによる生演奏だ。映像から動きも音声も抜き取ってしまうことによって、総合芸術たる映画の構成要素は解体される。そして、それらの要素をあらためて舞台上に再構成することによって、われわれが自明のものとして享受してきた認識のスタイルを軽やかに疑問に付すのである。

ここまで述べてくれば、この十数年のラビア・ムルエの探求と試行の果てにこの度の連続上演があることは明らかだろう。そしてこのラディカルな演劇家の新しい試みがどこに向かおうとしているのか、それを観客席から見定めようとするのは、われわれの特権であり喜びである。

イエッサ・ムルエの詩の世界 —— 『雲に乗って』より ——

『雲に乗って』の主人公であり、語り手でもあるイエッサ・ムルエ。彼は詩人として、これまでに2冊の詩集を出版している。劇中に登場する詩は彼の作品の中から、兄・ラビアが選んだものだ。 (訳：鵜戸 聡)

ピ ア ノ

僕にはピアノがある
そして5本の指が
僕は白い連中を弾くのがうまい

僕にはともだちのハーモニカがある
僕の職場には仕事も蓄えもない
僕はしばらく前から自分のからだの像^{すがた}を目にしたことがない
たとえ一瞬であっても

僕には星がある
僕には道はあるのか？
僕は歩みだすための許可を誰にも求めなかった

僕にはピアノがある
そして5本の指が

時 間

どれほどの時間が無為に過ぎていったのだろう
そして僕は長い舗道の上で立ち止まったまま
人の形をした彫像のように
そのことについて僕はじっくり考えるべきだった
そして存在の火を大気のなかに見いださねばならなかった
それはあっというまに時の羅針盤を変えてしまうだろう
風のように早く
そして水の分子の中で霧雨に変わるだろう

どれほどの時間が無為に過ぎていったのだろう
そして僕は岩を彫って砂にする
それがホメロスの形に
宮殿のような壮麗さになるように
「ロダン」は鑿のみのなかに人間を吹き込んだ
彼らは呼吸し、動き、乳を吸う
永き命！

どれほどの時間が無為に過ぎていったのだろう
そして僕はこっちの舗道から向かいの舗道へ走ろうと試みる
僕は自分のベッドから走り出ねばならなかった
体を洗いにお風呂の方へと
僕の幻影が僕を力強く抱きしめる夢を見た
それはかつてあったこと

どれほどの時間が無為に過ぎていったのだろう
そして僕は自分の前腕によりかかっている
「ロダン」は卓越していた
人間の形をした石を我がものとするに
それが物事の結論を
じっくりと導きだす知性となるよう手なずけたのだ
時の前髪によりかかりながら
それは昨日の自分にあったこと

オートマチックな交通が滞るなか
僕の注意を引いていたのは
大理石の舗道のタイルは
足の速い歩行者たちのためのもの
立ち止まって思索するには向いていないということ
どれほどの時間が無為に過ぎていったのだろう

—— ベイルート、レバノン

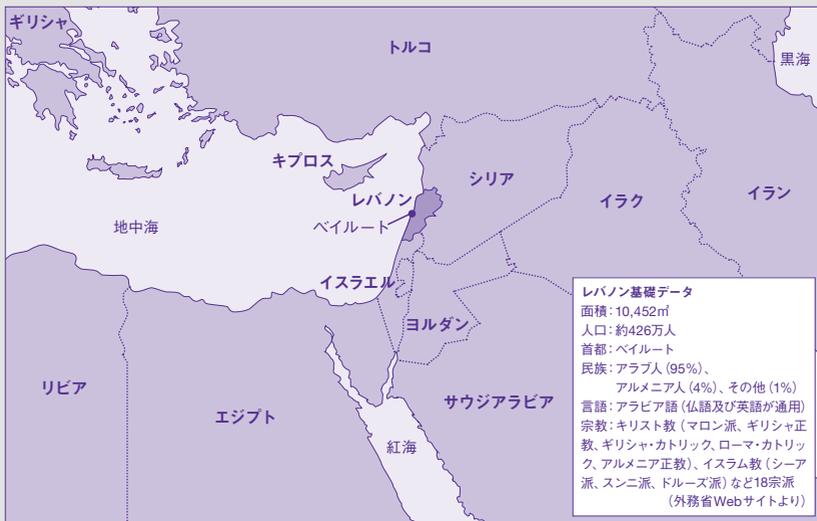
レバノン社会の歴史的背景

現在のシリア内戦が隣国レバノンにさまざまな影響を与えていることは、報道によって多少なりとも知られるようになってきた。両国の位置関係を改めて認識した日本人も多いだろう。そもそもシリア、レバノンは、第一次世界大戦後のフランスによる委任統治を経て1940年代に初めて独立した国家単位となったのであり、歴史的にはパレスチナ、ヨルダンを加えて「シャーム」(歴史的シリア)と呼ばれる地域に属し、「肥沃な三日月地帯」の西側として、東側のメソポタミア地域とともに人類史上もっとも古い文明が栄えた地に数えられる。

1943年に独立したレバノンは、キリスト教徒(特にマロン派)が多く居住する「レバノン山地」(オスマン帝国以来の行政区分)を拡大する形で国土を切り出され、キリスト教徒の割合が例外的に高い特殊な中東国家となった。大統領はマロン派、首相はスンナ派、国会議長はシーア派から選出するのが慣例となっており、国権を宗教コミュニティ別に配分する「宗派体制」が最大の特徴といえよう。1975年から1990年まで続いたレバノン内戦は、宗

派的な対立構造にパレスチナ解放運動や米ソ対立などの外的要因が絡み形で錯綜し、最終的にはシリア軍の介入によって終止符が打たれた。以後レバノンはシリアの実質的な支配下に置かれることとなったが、2005年のハリリーー首相暗殺(シリアの関与が疑われた)を契機として駐留シリア軍は完全撤退へと追い込まれ、15年続いたシリアの覇権はついに終焉を迎えた。

翌06年にはシーア派組織ヒズボラによるイスラエル軍兵士の拘束をきっかけに「レバノン紛争」が勃発、イスラエルによるレバノン各地の空爆と南部への侵攻が行われた。その後も親シリア派と反シリア派とがデモ合戦を繰り返すなど、シリアを争点に各勢力が合従連衡しているところで、今度はシリア自体が内戦化し、現在両国の国境は難民や武器が行き交っている。チュニジア、エジプトではまがりなりにも非武装の市民革命が達成されたが、シリアの革命運動はもはや民兵組織の抗争に変容しており、外国勢力の介入も加わって先行きは依然闇の中である。(解説: 鶴戸 聡)



「33rpmと数秒間」

作・演出：リナ・サーネー、ラビア・ムルエ
舞台デザイン、グラフィック、アニメーション：サマル・マカロン
技術ディレクション：サルマド・ルイス、トーマス・カッペル
フォト・ディレクション：サルマド・ルイス
制作：ペトラ・セルハール

"33rpm and a few seconds"

Text, Direction: Lina Saneh & Rabih Mroué
Set design, Graphics, Animation: Samar Maakaron
Technical Direction: Sarmad Louis, Thomas Köppel
Director of Photography: Sarmad Louis
Executive Producer: Petra Serhal

「雲に乗って」

作・演出：ラビア・ムルエ
共同演出：サルマド・ルイス
出演：イエッサ・ムルエ
制作アシスタント：ペトラ・セルハール

"Riding on a cloud"

Text, Direction: Rabih Mroué
Direction Collaboration: Sarmad Louis
Cast: Yasser Mroué
Production Assistant: Petra Serhal

「ピクセル化された革命」

監督・出演：ラビア・ムルエ

"The Pixelated Revolution"

Text, Direction, Cast: Rabih Mroué

東京公演スタッフ

Tokyo Performance Staff

「33rpmと数秒間」 「雲に乗って」

技術監督：寅川英司+鴉屋
技術監督アシスタント：河野千鶴、加藤由紀子
舞台監督：渡部景介
演出部：櫻井健太郎
美術・映像：TORAWORK
小道具：横川奈保子
照明コーディネーター：佐々木真喜子（株式会社ファクター）
音響コーディネーター：相川 晶（有限会社サウンドウイーズ）
字幕監修：幕内 覚（舞台字幕 / 映像 まくうち）
字幕・翻訳：エグリントンみか
通訳：石井園子、藤原敏史
記録写真：石川 純
記録映像：株式会社彩高堂「西池袋映像」

"33rpm and a few seconds", "Riding on a cloud"

Technical Manager: Eiji Torakawa + Karasuya
Assistant Technical Manager: Chizuru Kouno, Yukiko Kato
Stage Manager: Keisuke Watanabe
Stage Assistant: Kentaro Sakurai
Stage Design, Video: TORAWORK
Props: Naoko Yokokawa
Lighting Co-ordination: Makiko Sasaki (Factor Co., Ltd.)
Sound Co-ordination: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.)
Surtitles Advisor: Satoru Makuuchi
Translation, Surtitles: Mika Eglinton
Interpretation: Sonoko Ishii, Toshi Fujiwara
Photography: Jun Ishikawa
Video Documentation: Saikou Co., Ltd.

「ピクセル化された革命」

技術監督：寅川英司+鴉屋
技術監督アシスタント：河野千鶴
演出部：北村泰助
映像：TORAWORK
字幕・翻訳：エグリントンみか

"The Pixelated Revolution"

Technical Manager: Eiji Torakawa + Karasuya
Assistant Technical Manager: Chizuru Kouno
Stage Assistant: Taisuke Kitamura
Video: TORAWORK
Translation, Surtitle: Mika Eglinton

F/Tスタッフ

制作統括：武田知也
制作：椛山由香、喜友名織江
制作アシスタント：目澤美裕子
フロント運営：桜かおり、佐藤 武
プログラム・ディレクター：相馬千秋

F/T Staff

Production Manager: Tomoya Takeda
Production Co-ordination: Yuka Sugiyama, Orié Kiyuna
Production Assistant: Fuyuko Mezawa
Front of House: Kaori Sakura, Takeshi Sato
Program Director: Chiaki Soma

ユース・アート・マネジメント・プログラム (YAMP) :

伊藤羊子、今井美希、作田飛鳥、守山真利恵

Youth Arts Management Program (YAMP):

Yoko Ito, Miki Imai, Asuka Sakuta, Marie Moriyama

主催：フェスティバル/トーキョー

Presented by Festival/Tokyo

フェスティバル/トキョー組織委員

| | |
|-------|-------------------------------------|
| 天児牛大 | 振付家、演出家 |
| 萩田伍 | アシゲループホールディングス株式会社 代表取締役会長 兼 CEO |
| 扇田昭彦 | 演劇評論家 |
| 永井多恵子 | 公益社団法人国際演劇協会 (ITI /UNESCO) 日本センター会長 |
| 越川幸雄 | 演出家 |
| 野田秀樹 | 演出家 |
| 野村萬 | 狂言師 |
| 福原義春 | 株式会社資生堂 名誉会長 (50音順) |

フェスティバル/トキョー実行委員会

| | | |
|----------|-----------------------|----------------------------------|
| 名誉実行委員長 | 高野之夫 | 豊島区長 |
| 実行委員長 | 市村作知雄 | NPO法人アートネットワーク・ジャパン 会長 |
| 副委員長 | 吉末昌弘 | 豊島区文化工部長 |
| 委員 | 八巻規子 | 豊島区文化工部文化デザイン課長 |
| | 大沼映雄 | 公益財団法人としま未来文化財団 常務理事 / 事務局長 |
| | 岸正人 | 公益財団法人としま未来文化財団 部長 |
| | 蓮池奈緒子 | NPO法人アートネットワーク・ジャパン 理事長 |
| | 相馬千秋 | NPO法人アートネットワーク・ジャパン プログラム・ディレクター |
| 監事 | 天貝勝己 | 豊島区総務部総務課長 |
| 法務アドバイザー | 福井健策、北澤尚登 (骨董通り法律事務所) | |

フェスティバル/トキョー実行委員会事務局

| | |
|------------------|------------------------------------|
| プログラム・ディレクター | 相馬千秋 |
| 事務局長 | 蓮池奈緒子 |
| 事務局次長 | 小島寛大 |
| 制作統括 | 武田知也 |
| 制作 | 河合千佳、喜友名織江、小森あや、 相山由香、高橋マミ、戸田史子 |
| 公募プログラムコーディネーター | 小山ひとみ |
| メディア戦略・広報 | 松本花音 |
| メディア戦略・広報アシスタント | 北沢聡子、田村かのこ |
| オープン・プログラム | 藤井さゆり |
| オープン・プログラムアシスタント | 田野入涼子、後藤天 |
| 票券 | 長原理江 |
| 票券アシスタント | 菅原淳、伊楢敏 |
| チケットセンター | 佐々木由美子、佐藤久美子 |
| 総務 | 草原円花、一色善好 |
| 経理 | 堀久美子、青木亮子 |

技術監督

| | |
|------------|--------------------|
| 技術監督 | 荒川英司 |
| 技術監督アシスタント | 河野千鶴 |
| 照明コーディネーター | 佐々木真善子 (株式会社ファクター) |
| 音響コーディネーター | 相川晶 (有限会社サウンドワイズ) |

アートディレクション+デザイン

| | |
|---------|---------------------------|
| ウェブサイト | アジール (佐藤直樹+中澤耕平+菊地昌隆) |
| パブリシティ | 濱田真一+北島謙子+重松佑 (株式会社ソフトラボ) |
| 海外広報・翻訳 | 平昌子、望月章宏 |
| 物販 | アンドリュース・ウィリアム |
| 編集・執筆 | 渡辺淳 鈴木理映子 |

主催：フェスティバル/トキョー実行委員会

東京都・豊島区 / アーツカウンシル東京・東京文化発信プロジェクト室・東京芸術劇場 (公益財団法人東京歴史文化財団) / 公益財団法人としま未来文化財団 / NPO法人アートネットワーク・ジャパン
共催：公益社団法人国際演劇協会 (ITI/UNESCO) 日本センター
協賛：アシゲループ株式会社、株式会社資生堂、ブルームバーグ エル・ピー
助成：公益財団法人アシゲループ芸術文化財団
特別協力：西武池袋本店、東武百貨店池袋店、東武鉄道株式会社、株式会社サンシャインシティ、
チャコット株式会社
協力：東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、一般社団法人豊島区観光協会、一般社団法人豊島産業協会、公益社団法人豊島法人会、池袋インバウンド推進協力会、池袋ホテル会
メディアパートナー：ART IT、J-WAVE 81.3 FM、新潮、CINRA.NET、美術手帖
ホテルパートナー：サンシャインシティアリスホテル、ホテルメトロポリタン、ホテル グランドシティ、
サクラホテル池袋
地域パートナー：池袋西口商店街連合会、特定非営利活動法人セファール池袋まちづくり
宣伝協力：株式会社ポスターハリス・カンパニー、有限会社ネビュラエクストラサポート (公募プログラム)
会場協力：アサヒ・アートスクエア (公募プログラム)
認定：公益社団法人企業メナ協議会

平成25年度文化庁地域発・文化芸術創造発信インシアブ

[会期] 平成25年11月9日(土)～12月8日(日)

ユース・アート・マネジメント・プログラム (YAMP)：石井菜保子、伊集院明、伊藤安那、伊藤羊子、稲垣美実、乾亜沙美、今井美希、榎村 真、田 光、緒方彩乃、紙 弘、川又美穂、栗田知宏、奥水すみれ、
崔 温、作田飛鳥、藤原成行、澤田 唯、清水裕花、菅井新菜、田中ゆかり、宮川仁美、塚田佳都、野口 彩、平沢花彩、嵯 朝美、堀久美、三浦彩歌、水野恵美、守山真利恵、山崎 優、山本美幸、吉田崇大、吉田由貴

発行：フェスティバル/トキョー実行委員会 〒170-0001 東京都豊島区西巢鴨4-9-1 にしすがも創造舎 NPO法人アートネットワーク・ジャパン内 TEL:03-5961-5202 <http://festival-tokyo.jp/>
編集：鈴木理映子、フェスティバル/トキョー実行委員会事務局 アートディレクション+デザイン：佐藤直樹+中澤耕平 (ASYL)、小林 剛
※内容は変更になる場合がございます。ご了承ください。 禁無断転載

Festival/Tokyo Organization Committee

| | |
|--------------------|---|
| Ushio Amagatsu | Choreographer, Director |
| Hitoshi Ogita | Chairman and Representative Director, Chief Executive Officer, Asahi Group Holdings, Ltd. |
| Akihiko Senda | Theatre critic |
| Taeko Nagai | Chairman, Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO) |
| Yukio Ninagawa | Director |
| Hideki Noda | Director |
| Man Nomura | Kyogen actor |
| Yoshiharu Fukuhara | Honorary Chairman, Shiseido Co., Ltd. |

Festival/Tokyo Executive Committee

Honorary President of the Executive Committee: Yukio Takano, Mayor of Toshima City
Chairman of the Executive Committee: Sachio Ichimura, Arts Network Japan Director
Vice Chairman of the Executive Committee: Masahiro Yoshizue, Director of Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City
Committee Members:
Noriko Yamaki, Culture, Commerce and Industry Division, Director of Cultural Design Section
Hideo Onuma, Director of Secretariat of Toshima Future Culture Foundation
Masato Kishi, Executive Manager of Toshima Future Culture Foundation
Naoko Hasuake, Arts Network Japan Representative
Chiaki Soma, Arts Network Japan Program Director
Supervisor: Katsumi Amagai, General Affairs Director, Director of General Affairs Section of Toshima City
Legal Advisors: Kensaku Fukui, Hisaoki Kitazawa (Kotto Dori Law Office)

Executive Committee Office

Program Director: Chiaki Soma
Administrative Director: Naoko Hasuake
Vice Administrative Director: Hirotomo Kojima
Production Manager: Tomoya Takeda
Production Co-ordinators:
Chika Kawai, Oriie Kiyuna, Aya Komori, Yuka Sugiyama, Mami Takahashi, Fumiko Toda
Emerging Artists Program Co-ordination: Hitomi Oyama
Media Strategy: Kanon Matsumoto
Media Strategy Assistants: Satoko Kitazawa, Kanako Tamura
Open Program: Sayuri Fuji
Open Program Assistants: Suzuko Tanoiri, Takashi Goto
Ticket Administration: Rie Nagahara
Ticket Administration Assistants: Nagisa Sugahara, Jyonyong Yoon
Ticket Center: Yumiko Sasaki, Kumiko Sato
Administrators: Madoka Ashihara, Hisayoshi Ishshiki
Accounting: Kumiko Tsutsumi, Ryoko Aoki

Technical Director: Eiji Torakawa

Assistant Technical Director: Chizuru Kouno
Lighting Co-ordination: Makiko Sasaki (Factor Co., Ltd.)
Sound Co-ordination: Akira Akawa (Sound Weeds Inc.)

Art Direction + Design: Asy (Naoki Sato + Kohei Nakazawa + Masataka Kikuchi)

Website: Shihichi Hamada + Satoko Kitajima + Yu Shigematsu (Ioftwork Inc.)
Public Relations: Masako Taira, Akhiro Mochizuki
Overseas Public Relations, Translation: William Andrews
Merchandise: Jun Watanabe
Editor/Writer: Rieko Suzuki

Organized by Festival/Tokyo Executive Committee

Tokyo Metropolitan Government, Toshima City, Arts Council Tokyo & Tokyo Culture Creation Project & Tokyo Metropolitan Theatre (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture), Toshima Future Culture Foundation, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ)
Produced in association with Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)
Sponsored by Asahi Breweries, Ltd., Shiseido Co., Ltd., Bloomberg L.P.
Supported by Asahi Group Arts Foundation
Endorsed by Ministry of Foreign Affairs, GEIDANKYO
Special co-operation from SEIBU (IKEBUKUROHONTEN), TOBU DEPARTMENT STORE (IKEBUKURO, TOBU RAILWAY CO., Ltd., Sunshine City Corporation, Chacott Co., Ltd.)
In co-operation with the Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima, Toshima City Shopping Street Federation, Toshima City Federation, Toshima City Tourism Association, Toshima Industry Association, Toshima Corporation Association, Ikebukuro Inbound Association, Ikebukuro Hotel Association
Media Partners: ART IT, J-WAVE 81.3 FM, SHINCO, CINRA.NET, Bijuus Techo
Hotel Partners: Sunshin City Prince Hotel, Hotel Metropolitan, Hotel Grand City, Sakura Hotel Ikebukuro

Regional Partners: Ikebukuro Nishiguchi Shopping Street Federation, NPO Zephyr
PR Support: Poster Har's Company, Nevula Extra Support Co., Ltd. (for F/T Emerging Artists Program)
Venue Co-operation: Asahi Art Square (F/T Emerging Artists Program)

Approved by Association for Corporate Support of the Arts

Supported by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2013